かささぎ通信　第114号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2022年　5月　13日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年四月「森三郎の作品を読む会」では、「虹の松原」の読み比べ（『赤い鳥』[1936.8]と少国民文芸選『かさゝぎ物語』[1942.8]帝国教育会出版部）をしました。その後「ものぐさ物語」（『うぐひすの謡』[1943.8 拓南社]所収）を読みました。

森三郎の異類婚姻譚　構成比較表

	結婚相手	結婚前	結婚	子ども	別離	その後
かささぎ物語（『赤い鳥』1931.12）	天の星の侍女・かささぎ	男は老親に孝行するが相次いで亡くなり、一人になる	天上の女が地上に降りて、人間の男と結ばれる	無し	真実を見られた女は天上に帰る	男は女が織ったかたびらを持って旅に出る
虹の松原（『赤い鳥』1932.6）	虹の精の娘	虹の精に許しをもらい、地上に降りた娘を探す旅に出る	娘を探し出し結婚	有り	真実を知った女は子どもを残し、天上に帰る	全ては夢だった
夕顔物語（『赤い鳥』1936.8）	白鳥	男の鳥網にかかった白鳥の羽を男に隠される	白鳥の化身の娘は男と結婚。娘の姉の力を借りて難題を解決	有り	羽を取り返した女は子どもを残し、天上に帰る	男は子どもが夕顔になったことを知る

「かささぎ通信」113号で触れたように、森三郎の童話には「異類婚姻譚」がいくつかあります。今回の「虹の松原」は虹の精の娘の一人に思いを寄せた男が、人間として地上に生まれ変わった娘を探す旅に出かけ、結ばれる話です。男が出会った娘は顔に油墨を塗りつけられていましたが、雨で墨が流され、探していた「右の目の下の青いほくろ」の娘だと分かります。男の旅は娘を探し出せば報われると決まっていて、全てを失った後、旅に出る「かささぎ物語」の悲哀はありません。しかし幸せの中の油断から男は虹の精との約束を破り、真実を話してしまい、虹の子であることを知った女は天上に帰ってしまいます。全てを知った（知られた）天上界の人は地上に住めないことは「かささぎ物語」と同様です。しかしこの「虹の松原」には、地上に残さざるを得ない子どもを夕顔に化身させる「夕顔物語」のような悲惨な覚悟はありません。最終場面でこの話は、夕立の通り過ぎるのを待つひと時の夢であったことが分かります。長い冒険の話を夢の中の話とする構成の作品は、一九三二年二月号の「夜長物語」（筆名・菅沼七郎）で既に発表されています。しかも「夜長物語」は御伽草子「かくれ里」を子ども向きに再話した作品です（「かささぎ通信」88号参照）。昔話の、本来の美貌を不当に隠された継子の話や、御伽草子などの話を基にして、森三郎はこの「虹の松原」を創作したということが分かります。

今回（A）『赤い鳥』と（T）「帝国教育会出版部『かささぎ物語』」所収の「虹の松原」を読み比べてまず気が付いたことは、（A）では常陸のある村の男が肥後の国まで娘を探しに行きますが、（T）には特定の地名は出てこないということです。また（A）の虹の娘たちは「赤、青、紫」というように虹の通りの五色の着物を着た五人ですが、（T）は「赤、青、黄、紫」というように虹の七色の着物を着た七人の若い女となっていることも面白い違いです。

さて次に読んだ「ものぐさ物語」（『うぐひすの謡』1943.8所収）は作者自身の解説では「唐来三和の黄表紙『物臭太郎月』に学んだのですが、三和とは全然別なものにしています」となっています。実際、その中身は昔話「だんごどっこいしょ」から採ったと思われます。また、三郎には唐来三和の黄表紙「再会親子銭独楽」を題材にした「めぐりあひ」（1934.8）があります。三郎の創作の方法がこの作品からも分かります。

次回予定　二〇二二年六月十日（金）午後一時半～三時半

①　読み比べ「お染」（『赤い鳥』1932.12）と「向かふのお寺のお駒さん」（少国民文芸選『かさゝぎ物語』）

②「向日葵（ひまわり）」（『うぐひすの謡』1943年所収）